

ミステリアスなブガ球体を回収

内幕話 パート1

ディック・ラッセル

2025年6月27日

コロンビア西部の小さな町ブガの居住者は千人に満たない。しかしブガにある奇跡の主イエスの大聖堂はカトリック教会で最も印象的な巡礼地の1つであり、年に100万人以上の人を訪れている。

そして2025年3月2日、ブガの鄙びた郊外を訪れた中年男性ドン・ホセ・ロンポはこの地で自ら奇跡の瞬間を経験することになった。彼の人生はそのときから激変したのだった。

ホセは考古学愛好家であり、金属探知機を使って何年もブガのあちこちの丘や谷を探索し、たくさんの文化財を見つけてきた。彼と相棒1人は日曜日の午後1時15分に宝探しをしていた — 彼は時刻を正確に覚えている — そのとき何かが高速で飛んでいるシュっという音が近くで聞こえた。最初ホセは鳥だろうと思った。そのあと再度すごい勢いで飛ぶ音が彼のまうしろでした。彼は上を見上げた。すると空を小さな青い金属製の物体が猛スピードで移動していた。物体は東の方向へ弧を描いて飛び、そのあとこの地区にある陸軍基地、すなわち1500人ほどの兵士と沢山の軍備品を備えたブガパレス大隊基地の方へ向かった。

ホセが不思議な物を目撃するのはこれが初めてではなかった。13歳の少年だったころ彼は光の筋が空へ上っていくのを畏敬の念をこめて見守ったものだった。のちに同じ地域で夜2つのオーブも目撃した。「このようなことの先にブガ球体と出会うめぐり合わせが起こったのだと思います。」ホセはブガ球体との出会いに思いを馳せる。「今では分かるんです。あの音は球体が私に自分の存在を知らせるシグナルだったんです。」

彼のケータイのカメラの解像度は低かったし、まもなく充電が必要な状態だった。そこで相棒の男性に頼んで彼が購入したばかりの新しいiPhone11で撮影を始めてもらった。男性は幾度かの中断を挟んで約8分間撮影した。物体は旋回し始め、しばらくの

間丘の背後に姿を消した。その後球体がもどってきて、高圧線に近づいたとき、パンという破裂音がし、火花が散ったのがホセには見えた。バスケットボールより少し大きいくらいのその球体は明らかにショートし、ナビシステムないし飛行システムが働かなくなった。球体は下降し始めた後、再度上昇しようとしたがそれもかなわず、2本の木の枝の間にある斜面に着陸した。地球への着陸はおよそ10秒を要した。

ホセは好奇心に駆られ用心しつつ物体に近づいた。そして全面金属張りの球体に触れてみた。それは生温かく、「産み落とされたばかりの卵のようだった」。当初感じた恐れを克服し、球体を拾い上げた。ホセはピーナツの販売で生計を立てていたので、重さや大きさの推定はお手のものだった。物体はすごく軽いというほどではなかったが、約2キロ(4.4ポンド)と見積もった。ホセは相棒のもとに歩み寄り言った:「宝探しは今日はやめるべきだな。おれたちはもうお宝を見つけたんだから」。ホセはのちなつて球体が落ちた場所で球体の真下にあった草が水分を奪われて枯れているのに気が付いた。

2人は車に乗り、数マイル離れたホセの家まで球体を運んだ。ホセは球体と直接コミュニケーションをとったわけではなかったが、「奇妙なことに球体は私をととても穏やかな気持ちにしてくれました。」球体に刻まれた不思議なシンボルを見て「私が手に入れたこの物体はおそらく地球のものではないのかもしれないと気になり始めました。」

その日彼はシャツを着ておらず、しばらくの間球体を裸の腹にじかに抱えて歩きまわっていた。さほど時間をおかずに吐き気がしてきて、おう吐した。おまけに少しばかり頭痛もし、アルミニウムをなめたような味が舌に感じられた。肌の各所に赤い発疹も出た。

ホセのケータイは彼の指紋を認識しなくなり、操作出来なくなった。見ると彼の指紋は全部消えていた。指紋が元通りになるまでは2日を要した。

ホセはいとこに電話した。いとこは彼の金属探知機を製造した会社の電気技師であり、デジタル放射線技術を開発した人物だった。彼デヴィット・ヴェレスは地元でエル・ポトロ(仔馬)と呼ばれていた。彼はUFOの「信者」ではなかったが、ホセがホラ話を語るような人間ではないことを知っていた。

ホセはデヴィットにおれは医者に行かないといけないと言った。翌朝もホセは落ち着いていた。医者はたぶんアレルギーかウイルスによる疾患だろうと診断し、ホセに薬

をくれ、しばらく静養するようにと言った。ホセは再びいここに連絡をとり、こう頼んだ。「すぐに来てこいつを持ち去ってくれないか？」と。彼は球体の正体の分からぬエネルギーが自分を病気にしたり、さらには命まで取りかねないと恐れたのだった。



写真：2025年6月21日メキシコシティにてスティーブン・グリア博士(左)が制作予定のドキュメンタリーのためにドン・ホセ・ロンポにインタビューをしている。

いとこのデヴィットはブガ市からおよそ60マイルほど離れた町カリに住んでいた。彼は自分の会社から数人のメンバーを集めた。彼らは放射線や電磁界に晒されるかもしれないと考え防護服を着てワゴン車に乗り込み出発した。マスクをきつく装着しホセの家に入ると、デヴィットは球体をバッグに入れて口をしっかりと閉じた。

会社の実験室に戻ると、その万全のセキュリティのもとで球体の「検疫」をした。デヴィットはこう回想する。「我々は自分たちの想像を絶する物体を目の前にして、これを半分に切って(中身を)みたいと思った。でも他のみんながそれはダメだ、爆発しておれたちみんな死んでしまうかもしれないと止めた。それは杞憂だったが、おかげで球体は原状を保つことができた。

20日後に球体を再び計量すると、不可解なことに重さが3倍の6キロになっていた。球体はその後も重量を増加し続け、最終的には10キロ(22ポンド)になった。なぜ、どうやってこんなことが起こるのかは依然謎のままである。

彼らがテストを繰り返していたころ、一人の女性が飛んでいる球体をブガ市の反対側から撮ったビデオがニュースになった。そして噂が広がると、デヴィッドに不審な電話がかかってくるようになった。スペインからは球体の買い取りにかなりの額が提示された。ブラジル空軍と関係があると主張するある議員は彼らと一緒にドキュメンタリー・シリーズを作ろうと誘ってきたが、デイヴィッドの会社が球体に関するすべての権利を自分に移譲するよう望んだ。またある民間非営利団体に属しているという人物はその球体が拾われる前には自分たちのものだったと主張した。彼らが球体をリバースエンジニアリングしているときに、制御不能になって数百マイル飛んだ末にホセに拾われたのだと。だから返却して欲しいという。デイヴィッドはもしこれらの要求のどれかに応えたら、きっと球体は二度と戻ってこないだろうと分かっていた。



写真: グリア博士とデヴィッド・ヴェレス(通称: 仔馬)。ハイメ・マウサン宅にて。

ダヴィッドは自分の手に余る状況になっていることを悟った。何者かが球体の秘密が明かされることをひどく恐れているのだった。彼のソーシャルメディアのアカウントは乗っ取られ、真夜中にかかってくる電話に起こされることも増えてきた。「お前は大嘘つきだと、いろんな連中がいうのです」とダヴィッドはいう。彼の会社の評判も危うくなった。

彼はメキシコシティの有名なジャーナリスト兼 UFO 研究者であるハイメ・マウサンの活動をよく知っていた。そこでダヴィッドは球体をマウサンの科学的調査に委ねることにした。知らせを受けたマウサンはコロンビアに飛んで球体を受け取り、彼の総合研究所内にある厳重なセキュリティを施された金庫に収納した。そしてマウサンは2025年6月に記者会見を催した。彼は会見室のカメラの放列の前でホセとダヴィッド、さらにメキシコの一流の研究所に勤める科学者たち数名を紹介した。記者会見には米国の著名な共和党下院議員であるエリック・バーリソン(ミズリー州)、ディスクロージャー・プロジェクトのステイブン・グリア博士、弁護士のダニエル・シーハンたちも参加した。

ダヴィッドは同じような球体を目撃して動画に撮った人が他にいれば、その映像を送って欲しいと依頼していた。その結果、「コロンビア各地から10の異なる球体動画が私に送られてきました」と明かした。

「私たちはコンタクトへの道を歩んでいるのでしょうか？」とマウサンは記者会見に集まった人たちに問いかけた。「これは今日私たちが直面している尋常ならざる問いなのです」。



写真: プガ球体のシンボル部分の拡大映像

次回: 科学者たちは何と言っているか